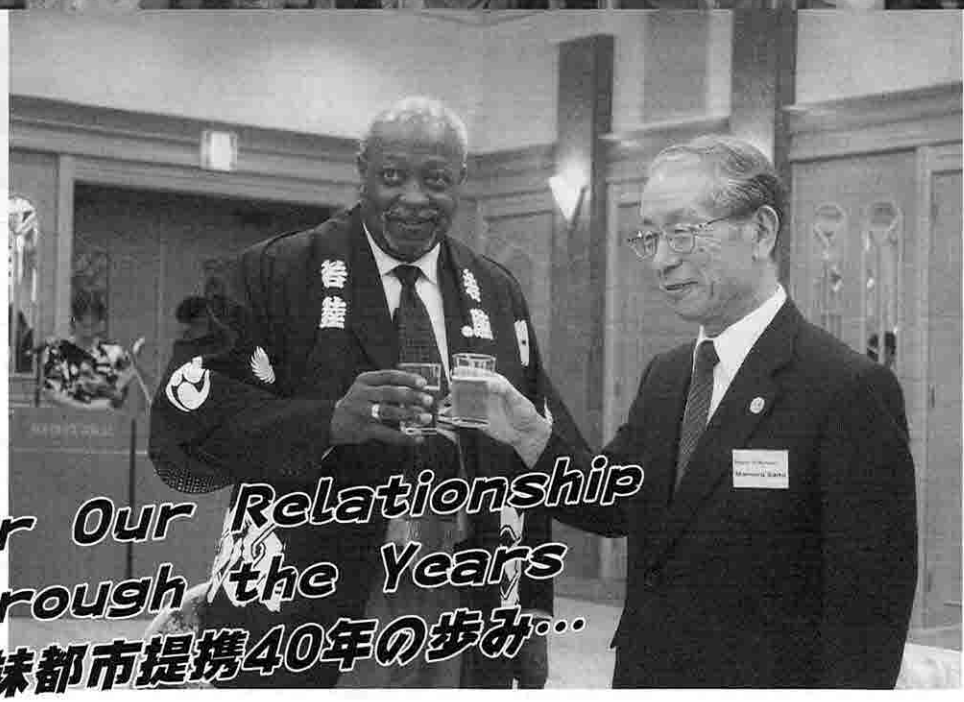
サ・NICE

Numazu association for International Communications & Exchanges

Vol.47
発行日　2003年９月10日
発行者　NICE沼津国際交流協会
（企画広報部会）
所在地　沼津市御幸町１６番１号
（事務局）　沼津市役所地域づくり推進課国際交流室内
☎055－934－4717



For Our Relationship Through the Years
姉妹都市提携40年の歩み…

For Our Relationship Through the Years

姉妹都市提携40周年を盛大にお祝いして

For Our Relationship Through the Yearsというのが、今回のモットーでした。部会での協議を重ね、他部会のみなさまのご協力もたくさんいただき、ゲストには、非常に喜んでいただき、すばらしい思い出をいっぱいお持ち帰りいただくことができました。ここにあらためてご協力を感謝いたします。

当初は60数名が来沼を希望されましたが、イラク戦争、SARS問題、アメリカの経済事情（イラク戦争に伴う失業、またその後のカラマズーの人口の５人に２人が関係者といわれる製薬会社の1,000人規模のレイオフのため予定しながら取りやめた方が続出）等で、結局41名の訪問となりました。

30周年は、チルドレンズコーラスで記念イベントをしましたので、10年後は、チルドレンも成長し、もう少しハイな年齢の方たちになにかお願いできるといいなというのが、最初の希望でした。幸い、全米でも五指に入り、また100年前には永井荷風も留学したカラマズーカレッジのジャズバンドの精鋭のセプテットが実現しました。見たことも聞いたこともない日本伝統音楽とのコラボレーションには一抹の不安がありましたが、最後はすばらしいミュージックエクスチェンジができ感動的な一瞬でした。

また日米双方にキルターが多いことから展示をしよう、先人が積み重ねてくださった歴史もふりかえろう、そして次の10年を考えようと計画はどんどん膨らんでいきました。どのイベントもすばらしいと賛辞をいただき、ことに交流展では、うんうんそうそう……と頷きながら、かつてを思い出している場面が多く、市長表敬時にいただいたカレッジの旗をすぐ展示して副学長に喜ばれ、その結果別のフラッグもいただきました。それはコンサートのバックステージを飾りました。展示のどのデータも納得がいくものばかりのようでした。逆にあのデータがほしいと向こうの事務局からリクエストがあったほどです。また、９月にカラマズーの版画家メアリー・ブロドペクさんとその仲間たちの作品が日本の作家たちと一緒に東京で展覧会をします。その中の作品５点をお借りして展示しました。この日米の版画展は、来年こちらから訪問する時期に合わせて、カラマズーの美術館でも展示されます。

今回の訪問団の中には、40年前に両親が提携時の記念植樹の前で写真を撮ったので、大きくなっている木の前で写真を撮り、それを91歳になる父親に見せたいという姉妹がいらっしゃいました。一時は、市立校の新校舎建築の際にその記念樹は伐採されたという情報が入り青くなりましたが、すっかり整備されるまで仮植されているのを知りホッとしました。数年前、カラマズーご自慢の全米で最初にできた公園形式のショッピングモール通りが時代のニーズに合わなくなり、全部取り払って車が進入できるように工事されました。しかし、記念樹だけは大事に残されていました。完成後は、贈呈された灯篭も戻りそこだけ復元されていました。ということを目の当たりにしていたので、一瞬どうしたものかと思ったのでした。姉妹は、見上げるほどのヒマラヤスギの前で撮った写真をご家族に見せていることでしょう。カラマズーの市花でもあるリラ（ライラック）を40周年の記念植樹としました。沼津でもよく花をつけ、両市の今を象徴していると思ったからです。

For Our Relationship Through the Years

今回は、仏教に関心があるかた、こちらの彫刻家とぜひお会いしたいかたとか、事前にご希望をうかがっていましたので、個人的な望みもかなえられるよう配慮しました。帰途、オーバーブッキングで、延泊と日本への次回半額航空券を喜んで受けた大学生３人もあり、満足度が高かったことが再訪を希望していることからもおわかりでしょう。１日遅れのビジネスクラスでの快適な旅だったと報告がありました。

歓迎会は、交換教師シンシアの送別会も兼ね、彼女の自作のお別れの歌も印象的でした。また大学時代の恩師と再会もしていました。まさか沼津で遭遇するとは思っていなかったようでした。彼女の２枚目のＣＤに納めようとしている沼津へのお別れの歌です。

(Title: Not the End--a farewell song to the people of Numazu by Cynthia Joan)

Don't know what to say
There's no way I can repay
All the kindness that you gave me from the start

And I hold so dear
All the memories we made here,
All the smiles that you have planted in my heart.

I know this is not the end
I will always call you friends
And although I cannot stay,
I may be half a world away,
But my thoughts are with you time and time again.

Thank you for the love you send
I know this is not the end
For my thoughts will always fly
Like a song across the sky
To the place where I first came to call you "friends."

Copyright 2003 Cynthia Joan

この惜別の歌が刺激になったのか、作曲もするバンドメンバーが沼津への“ありがとうミュージック”を作りました。みなさまにもぜひお聞かせしたいと思います。また交換留学生の壮行会も兼ねていましたが、選ばれた留学生市川恵子さんも渡米前にカラマズーのたくさんのかたと知り合えて、向こうでの生活をスムーズに始められることでしょう。

訪問団より、１週間早く到着した交換留学生に何をしたいか聞きましたら、なんと「ゲイシャになりたい！」でした。京都への研修旅行で舞妓さん体験をしていることを聞きつけてのことでしょうが、ちょうど京都へ出かけたときは祇園祭りの日で、ホテルも予約が取りにくい上高く大変でしたが、またとない経験もでき感謝されました。金閣寺の門前で、このたびのジャズバンドの橋渡しをしてくださったジェニファーさんとばったり。カレッジの生徒さんを案内しての旅でした。お互いに「スモールワールド！」と奇遇に歓声をあげました。

夏祭りのオープニングセレモニーでもジャズの演奏があり、花火を楽しんだあと、一緒に歩いていたジャカラを見て、「ひょっとして、あのときのボーカリスト？」と声をかけられるなど、市民のみなさまにも今回の訪問が広く知られていることを感じました。

手まりを届けてくださったり、お手製の木製くつべらと孫の手をゲスト全員にプレゼントしてくださったり、ワークショップでインストラクターになってくれた小学生、コンサートのお手伝いの高校生、と多くの市民を巻き込んでのイベントが無事終了しました。ホストファミリーのみなさまにもお世話になりました。みなさまのご協力、どうもありがとうございました。

For Our Relationship Through the Years

A Letter from Kalamazoo

カラマズーカレッジのジャズバンドのメンバーの一人、トランペット奏者のエーロン・マクレランよりこんなお便りが寄せられました。

It was Monday morning and I was anxiously awaiting the arrival of my host family while frantically trying to wrap the gifts I had brought for them. It had been decided that it was better for us to wait until we had arrived in Japan to wrap our gifts in case airport security needed to search them. I had preconceptions about Japan which had been filtered through our respective pop cultures and of course, we had all read the obligatory "this is what to expect from your host family" guide book that I assume is given to everyone involved in these kind of inter-cultural familial exchanges. I wondered what my host family's guidebook said about me.

My fear was forgotten as soon as Mr. and Mrs. Yoshikawa (my soon to be Otosan and Okasan) arrived at my hotel door. The tension was instantly relieved and the anxiety would not return for the rest of the week. I noticed that they seemed to be relaxed a bit as well and it occurred to me that they must have felt just as anxious. In the hotel lobby, I was introduced to my sister Shoko, her husband Yotchan, and their 3-year-old daughter Matchan. The meeting felt so natural that it was almost more like a reunion rather than a round of introductions. Later that day, we would travel together into the hills and mountains surrounding Numazu; our final destination was the beautiful area of Shuzenji.

＊＊＊

It was Monday evening and I was playing improvisational classical music with Shoko. Shoko, a perfect-pitched piano virtuoso, was improvising some gorgeous lines while I listened and tried to accompany her with my flugelhorn. Inspired by a discussion concerning the essence of jazz-and perhaps several rounds of sake-we decided to play together. With the family gathered around to listen and watch, we jammed for about an hour. Everyone was happy. There is nothing like music that helps people transcend language and cultural barriers.

＊＊＊

It was Tuesday sometime in the middle of the day and 3-year-old Matchan was writing some music for me. The previous day she was very shy and rarely spoke anything in my presence, yet now she was talking to me like I understood Japanese and wanting me to play games with her. I had just listened to her play some piano music with Okasan and now she wanted to write some for me. She took out a small piece of paper and slowly traced out the curves of a quarter note and then a half note, then handed it to me with a very serious face. Yotchan, her father, told me that she wanted me to put it into my pocket so that I wouldn't lose it. I still have it.

＊＊＊

It was a warm Wednesday morning, but I was freezing cold. I was standing on the side of Mt. Fuji a few thousand meters up and struggling to catch my breath. In mid-western America, there is nothing even resembling a mountain, let alone one as majestic as Mt. Fuji.

For Our Relationship Through the Years

I was experiencing something on a scale that I had never dreamed of before. Walking up along the narrow and rocky path, I peered upwards at what seemed like a never-ending incline. Thick clouds swirled around me and I could barely see friends only 10 feet in front of me. All around me I could hear the jingling of bells that adorned the sticks of Japanese hikers. Never before had I felt so small and never before had I felt so much power.

＊＊＊

It was Friday night and I was playing a solo in the jazz band concert. This was the first time that I had ever played my trumpet in a foreign country and surprisingly I wasn't very nervous. The lights were comfortably dim and the energy from the audience was supportive. As I played, I thought of the love and kindness that I had received from my Japanese family and from everyone I met the previous week. I thought of all the wonderful new places I had seen and the wonderful new ideas. And then, I wasn't thinking... just feeling. With my music I was trying to say, "Thank you so much Mr. and Mrs. Yoshikawa, Sayuri, Shoko, Yot-chan, Matchan, Takako, and Hana for letting me into your life this week and sharing with me your culture and love."

＊＊＊

It would be easy to fill many pages with all the experiences that I had during this week. Suffice it to say, I feel so honored to have been a participant in this exceptional and inspiring exchange of cities and would like to thank those involved with N.I.C.E. for all their hard work in arranging and organizing the week's activities. You all did a wonderful job and I know all of us from Kalamazoo will remember and cherish our experiences for the rest of our lives. I also want to personally thank Fusako for her kind words and calm wisdom.

For Our Relationship Through the Years

カラマズーカレッジ ジャズバンドコンサート

カラマズーゆかりの名曲 I've Got a Gal in Kalamazoo

日米合同演奏実現までのプロセス

――「不可能」が「可能」になった３日間――

ジャズコンサート担当 **尾 上 敏 起**

カラマズー部会での「日米合同演奏にしましょう」という提案にはじめから徹底して反意を示してきた私でした。つまり、「邦楽やオーケストラがジャズとコラボレーションをするのはよく耳にはするけれど、クラシックとジャズではビートの感覚が全く逆だし、五音階の邦楽と12音階の洋楽とでは経験豊かな演奏者同士でもよっぽどじっくり時間をかけてリハーサルしなければとても聴衆に聴かせられるものにはならない。どうしてもというならK大学バンドが来沼してからその力量を見て判断すればいいでしょう。」という考えでした。しかし、予想を大きく上回って“瓢箪から駒”といってもよい奇跡が実現したのです。その顛末を日記風にお話しましょう。

23日㈬18：00―20：00東高での練習第２日。

昨夕の決定に従ってプログラム通りに11曲を練習した後、琴の育美さんも見学する中で合同演奏曲の練習。ヴォーカルのジャカラがとびっきりうまい！

配付してあった楽譜をバンドに合わせてヘ長調から１音下げて変ホ長調に変更せねばならず、ジャスティンのピアノ譜を２日間借りる事になる。エヴァンズ教授（トム）の提案で、合同演奏はリレー方式でやりましょう、ということになる。この曲を１回目は邦楽、２回目は弦楽、３回目・４回目はジャズバンドという風にリレーして４回繰り返すというもの。これなら合わせ練習の必要もなく本番を迎えられそう。

24日㈭21：00―21：40弦楽アンサンブルリハーサル（演奏会場で）。

第１ヴァイオリンにエヴァンズ夫人が加わる。日頃からクラシック専門なので、ジャズ音楽特有の難しいリズムやシンコペーションがなかなか会得できずにいると、ご主人トムが舞台に上がって沼津交響楽団のメンバー10人に的確な指導が始まる。夫人が何度かお手本を示すなかで次第にリズム感が良くなる。最後に琴の育美さんも弦に加わりメロデイーラインをきっちり担当する。さすが師匠だ。西洋音楽の音階も早いリズムも見事に再現している。

25日㈮14：00―16：00会場のステージで直前のゲネプロ（舞台総練習）。

演奏会は音響係・照明係・舞台係の三者で裏方を構成します。ジャズバンドがプログラムの順に従って演奏し最後の調整をやるなかで彼らはたった１回聞いただけで方針決定せねばならない。今さら演奏者への注文は出来ない。音響は７人のマイクから拾った音を、バランスよくミックスしてスピーカーに出力する仕事。照明は背景の色調を設定したりスポットを使いソロを際立たせる仕事。舞台係は転換に東高生10名の協力を得て迅速・スムーズにセッテイングを行う仕事。カラマズーカレッジのゲネプロは、沼津文化センターの経験豊かなスタッフのおかげで順調に終了。16：00に尺八の青木さんが職場を休んでかけつけ合同演奏の練習開始。尺八が琴の上にピッタリとリズムとメロディーを重ねて、ジャズ演奏にバトンタッチ。アフタービートのリズム部門が不足なので本番にはウィルのドラムセットを小さくかぶせる事が提案される。結局、弦楽も加わったリレー方式の合同演奏は一度も通し練習なしに本番を迎える事となったが、昨夜の練習もうまくいったしこれなら合同演奏は成功しそうだ。

ここで、私は決断しトムに修正を申し出たのです。「４回目はヴォーカルを入れたジャズバンドではなくて、邦楽も弦楽もだまって聞いているのではなくて、是非全員参加の合同演奏をやりましょう」と。それは開演２時間前のことでした。かくしてあの夢の競演はぶっつけ本番で生まれたのでした。会場一杯のスタンディング・オーベイションを頂いて、出演者も会場と一体となって、感激の一夜となりました。あなたはいかがでしたか？

For Our Relationship Through the Years

私の40周年記念ホームステイ

カラマズー部会員 小 野 美 子

今年のホームステイは、私が家族を巻き込んで始めてから40年になるということに気がつきました。40年前には、女子大生に浴衣の着せ方をまちがえて失敗したものでした。歳月を経て、本年は平凡にクリアできました。力まずに受け入れたことが無理をしないことにつながり、続けられた原因だと信じています。

Thomas家は音楽一家です。私達は最近演奏するよりも鑑賞する方になっています。才能ある人は努力しなければならないが、楽しむ方が自分達には向いてる事を伝えると『audienceはとても大事な人々です』と持ち上げてくれました。ふだん出番のなかった譜面台、尺八、琴もとても役に立ちました。夕食前の少しの間、練習ができた事も一安心でした。尺八も吹いてみたいというので、「難しいので音が出るだけでOK」というと、時々できたので上機嫌でした。父と息子は尺八を楽しみ写真をとって喜んでいました。文化センターでの演奏者の紋付の着物を着ての様子と着物のたたみ方に感激したと奥様が言っていました。若い人が伝統的な物事に取り組む傾向が昨今、減っている事も付け加えました。琴についての質問もありました。近年、多くの楽器があるので習う人が少ない事、昔は女の子が子供の時に練習した事を言うと納得したようでした。「さくら、さくら」だけを弾きました。悲しそうな音や、きれいな響きに少しだけ昔の気分を感じてくれたかもしれません。

日本食にはとても期待していたらしく、箸の使い方を練習してきていたので、疲れる事はありませんでした。Challenge精神が感じられました。11歳のマシューは辛いものも大好きですが、やはり女の子は甘いものが好きなので要注意という事でした。御飯にわさび漬け、らっきょう、のり、刻んだつけもの、梅干少々という朝食はおかわりをする程でした。どうやって作るのと言われましたが、らっきょう漬けもしょうが漬けもとても時間をかけてできた食品ですから、やはり価値があるということに、私自身気がつきました。彼ら一家も毎日肉料理を食べるわけではないのだそうです。個人差があるようです。今回一番うれしかったのは、富士山から湧き出した水が毎日の水道水である事を知ってもらった事とのどがかわいたら“Water is best!”という事でした。買っておいた特大のコーラもジュースも不要でした。間食はあまりしない。少しnutsをつまむぐらいで、氷を入れた水を飲む。健康的だし、私も楽だし、いい事この上なしでした。

日曜日はドライブをしました。早起きして湖は小さくても正確に富士五湖を巡りました。山中湖ではモーターボート、ペダルボートの定番コースをクリアしました。氷穴はとても快適な涼しさでした。最後に私達が何度行っても楽しい富士宮のベゴニアの植物園を訪れました。行くたびにふくろうの種類がふえて満足度100%でした。帰りの時間を気にしながらの（私がツアコンですから）ドライブは無事終了しました。

最後に一言つけ加えたいのは、少年ということで女子高生がマシューに甘く、かわいがりすぎてしまったこと。帰ったら、いかに自分がもてたかをしゃべりまくると上機嫌でした。反対に、女の子に積極的に話しかける男子生徒はいないものですね？

国際理解教育部会

『白き神々住む国、ネパール』

平成15年度第1回国際交流サロン

6月22日(日)沼津市立図書館で、ネパールのお国紹介講座が開催されました。

講師は、ネパール出身で“ふじのくに親善大使”のナレス・マハラジャンさん、ディリプ・マハラジャンさんご兄弟です。まず第一部では、目をつぶって聞いていると日本人が話しているのではないかと思うほど流暢な日本語を話すお兄さんのナレスさんがネパールの地理・民族・国旗・生き神クマリ・占いなどについてビデオやパワーポイントを駆使してビジュアルに紹介。第二部では、やはり流暢な日本語を話す弟のディリプさんがナレスさんや応援で来て下さった日本人のお友達と一緒にダンスを披露して下さいました。

ネパールは中国の南、インドの北側に位置しており、首都はカトマンズ、通貨はルピー、世界で唯一のヒンズー王国ですがヒンズー教と仏教が見事に調和しています。ネパールの面積は147,181平方km、地球の0.1%しか占めていませんが、海抜60mの最も低い地点と、世界最高峰で、標高8,848mのエベレストという最も高い場所が150kmしか離れていない所にあるため様々な気候風土を生み出しており、848種の鳥、500種以上の蝶、600種以上の植物、319種の蘭のふるさとになっています。

スタッフのコメント

- 講師が自分の国の文化に誇りを持って紹介している姿に愛国心を感じました。国内の色々な地方の民族や言葉、習慣などを実にわかりやすく説明してくださり、良く勉強している方だと感心しました。
- ネパールでは占いが盛んで占いが生活の基準であることや、実際にはカースト制度がまだ残っており身分の違いで自由に結婚が出来ないことなどが印象的でした。最後にみんなでダンスをしたのが楽しかったです。
- 生年月日と生まれた時間がわかると驚くほど当たるサイババの占いの話がとても印象に残っています。
- ネパールの民族衣装を着ることが出来て嬉しかったです。それぞれの踊りに生活に密着した意味があり物語になっており、特に、男性が結婚したい女性の親の許しを乞う踊りはユーモラスで楽しかったです。
- 民族によって顔が違う話、生き神クマリの話が興味深かったです。
- 最後のダンスは多くの人が参加して楽しそうでした。

ふれあい部会

暑い熱い"燦々おどり"でふれあいを。

7月26日㈯に、ぬまづ夏まつりのプログラムになっています「燦々ぬまづ踊り」に参加しました。

今年は、踊る距離が倍以上になり参加者の体力を心配したのですが、出発前の小雨が程好い暑さしのぎになりました。

自前の民族衣装で踊ってくれた方、冬の衣裳で頑張ってくれた方、練習に欠かさず来てくれた方、飛び入りしてくれた方、そして、カラマズーからのお客様の何人かが浴衣を着たり法被を着たりしてとても楽しそうに参加してくれました。

踊った後の冷たい飲み物とおにぎり、そしておしゃべり（滑らかな英語??タドタド……??語）で終了するのが一苦労のふれあいの一時でした。

「燦々ぬまづ踊り」に初参加

菊　池　ひとみ

私が、「燦々ぬまづ踊り」に参加しようと思ったきっかけは、「広報ぬまづ」に掲載されていた「燦々ぬまづ踊りで国際交流をしませんか」を見て、どんなものかと期待しながら練習に参加しました。元々踊ることが好きな私は、参加することが大変楽しみでした。

踊りの当日は、果たして上手く踊れるのかと期待と不安が入り混じる中、会場へ向かい、出番が近くなるにつれて、ドキドキしてきました。子供たちの「ワッショイ」と「シャギリ」そして私たちの燦々ぬまづ踊りの出発を迎える頃には、大変な賑やかさでした。

大勢で楽しく踊る感動は、その場で体験しなければ分からないものだと感じました。私にとって「燦々ぬまづ踊り」への参加は、良い思い出となりました。今後この街が明るく賑やかな街に変わって行く大きなイベントだと感動しました。来年も出場したい!!

タイ農業青年来沼！

タイ農業青年23名の来沼スケジュール(案)。

11／18㈫	青年来沼 オリエンテーション 歓迎会（ブケ東海）
11／19㈬	陶芸体験 市長表敬訪問 御用邸見学
11／20㈭	農業体験
11／21㈮	干物体験 ホームステイ
11／22㈯	ホームステイ
11／23㈷	ホームステイ 国際交流フェア（学習院遊泳場）
11／24㈰	歓送会（沼津東急ホテル）
11／25㈫	青果市場見学 青年離沼

多くの会員の方のご協力を必要としています。一人でも多くの方のご参加をお願いいたします。

岳陽部会

本多傳前岳陽部会長「ニューエルダーシチズン賞」受賞

本多傳前岳陽部会が第３回ニューエルダーシチズン賞を受賞されました。おめでとうございます。

この賞は70歳以上の高齢者を対象に、様々な分野で活躍している「元気な高齢者」豊かに創造的に生きている「人生の達人」を日本全国・海外からも募集し、表彰するものです。読売新聞社主催、厚生労働省後援、日野原重明聖路加国際病院理事長を審査委員長に他６人の審査委員で数回の審査・選考を経て、このたび見事、栄えある受賞となりました。今回は533人の応募があり、本多さんは現役の眼科医、90歳の卒壽を記念しての「チャリティー仏画展」の開催、「仏画集」の発刊、カラオケで大病を克服したこと、友好都市中国岳陽市の『名誉市民』になっていること等の内容で応募し、素晴らしい人生が評価されたものと思われます。９月28日(日)から読売新聞のホームページ内で入賞作品の紹介、９月末日受賞作品集の発行、10月７日雑誌「婦人公論」に紹介があります。ご一読を！

指書道に乞うご期待！

友好都市岳陽市の書道家唐懐岳氏を迎えて珍しい右手指書道の実演・展示会を開催いたします。指のつめで一気に描く書道芸術で毛筆とは違った硬さがある字体が特徴です。

開催期間：2003年11月３日(祝)～６日(木)
場所：沼津市民文化センター　展示室

第１回中国料理教室が開催されました

講師の唐美婷さんは昨年に続いてのお願いになりました。今回も中国の一般家庭のご飯の「おかず」を３品教えていただきました。いつでもどこでもすぐに手に入る食材を使い、特別用意しなくても良い調味料で味付けをし、「脂っこい」と思いきや、なんとあっさりとした味付け、見た目もよく、美味しい惣菜でした。参加された方々も、唐さんの包丁の使い方、段取り、火加減などに目を凝らし、メモを取ったり、うなずいたり、各調理台でそれぞれ、更にレパートリーを増やすべく腕を振るっていました。歓声が上がったり、首をかしげながら味見をする人、納得している人、相談をしながら手を動かす人、出来上がって皆一緒に「いただきまーす。」舌鼓を打って「美味しい！おいしい！」「ごちそうさまでした。」　（岳陽部会　**藤澤昭光**）

講師：唐美婷さん（福建出身）

１．冬瓜スープ（冬瓜湯）

中国では冬瓜は夏場の暑気払いとして食され淡白ゆえに、肉のエキスとあいまって、柔らかく、スルッとした喉越しの良いスープです。

２．豚肉のスペアリブと薩摩芋のスタミナソース和え（酔排骨）

スペアリブの旨みが、お酢によって更に引き出され、食欲をそそる家庭料理の逸品です。

３．焼きビーフンスタミナ風炒め（炒米粉）

ご飯代わりになるおかずです。タレをかけて、一味違ったビーフン料理です。

※レシピの欲しい方は事務局にありますのでどうぞ!!

第２回目は10月12日(日)
第一地区センターにて
浙江省温州料理の予定

11月から太極拳教室が開催されます！